〈地域調査報告〉　阿武隈山村・山舟生の環境文化資源と地域の力（1）――出会い，地域性，場所――

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高野, 岳彦, 福援ゼミ メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24013

〈地域調査報告〉

阿武隈山村･山舟生の環境文化資源と地域の力(1)

―― 出会い，地域性，場所 ――

高野岳彦・福援ゼミ

東北学院大学教養学部地域構想学科

Ⅰ.「福援ゼミ」の立ち上げ

1．福島県事業への応募と「福援ゼミ」

2015年度の高野ゼミでは，福島県の「大学生の力を活用した集落復興支援事業」に応募・採択され，翌16年度と２ケ年にわたって，福島・宮城県境の山村の人々と交流し，阿武隈低山地帯の里山の村の多彩な地域資源を体感する貴重な機会を持つことができた。本事業は，福島県内の中山間地域を大学生が訪れ，彼らの新鮮な「外」の目で地域の良さを発見し，地域づくりへのアイディアを提言してもらうことを目的にした事業で，2009年から始まっている。震災・原発事故後の2012年度から事業名に「復興」が付された。応募主体は学生グループで，県内と隣県の大学のゼミが多い。採択さると年13万円の活動費が支給され，現地調査を行って「地域の宝」を発見し「提言」とともに報告することが求められる。事業期間は２年間で，２年目はこの「提言」の具体化を伴う実践活動とその成果の報告を行う。

事業への応募は高野がゼミ学生に提案し，関心を示した女子学生たちの賛同を得て，その１人を代表者とする「福援ゼミ」のグループ名で申し込み，多数の受託契約書類を作成して，５月末の締め切りまでに応募した。そして６月上旬，マッチングの連絡をうけたのが「やまふにゅう」という印象的な響きの地区であった。

さっそくその場所を地図で探し，そこが丸森町に接する県境の山村「山舟生」であること，同時に和紙，あんぽ柿の特産物，山車祭りやあじさい祭りなどのイベント，太鼓や漫才，笠踊りなどの伝統芸能，そして羽山とその信仰が地域の自然的･文化的シンボルとなっていることをweb検索を通して把握した。また，2009・10年度に同事業で東北大学公共政策大学院グループが山舟生に入って調査・提言を行い，webに公開されていることを知った[★1]。その内容は私たちの参考になるが，伝統芸能の「太鼓」の盛り上げが実践される一方で，地域を構成する環境資源や場所，人々の生業や生活の姿は描かれていない。そこで私たちの活動においては，山舟生を構成する様々な「場所」と人々の姿，そして地域づくりの歴史をまず知り，それをふまえて本事業が求める「地域の宝」を感取したいと考えた。

またこれらの既存情報から，山舟生は「集落復興支援」という事業名からイメージされる「限界」で形容されるような集落とは異なり，活力に富む地区のように思われた。実際にその後の交流を通して，「福援」と称するのはおこがましい，教えられ，学ぶことの多い体験となった。本報告は２年間の活動の第一報として，山舟生との「出会い」から既存情報の整理による地域性把握までについてレポートする。

2．山舟生との鮮烈な出会い

1）山舟生へ

山舟生の情報を整理しつつあった６月中旬，以後多大な支援をいただくことになる山舟生自治振興会の事務局長から，７月５日（日）と11日（土）の両日に開催される地域イベント「第12回あじさい祭り」と「第７回ペットボタル」への招待状が届いた。

７月５日９時半，泉キャンパスから１時間半で山舟生に到着。地区の入り口でさっそく「地域の力」を感じさせる看板（**写真１**）に迎えられる。そして地区の中央部にある「山舟生地区交流館」（林業構造改善センター）に立ち寄り，自治振興会の事務局で挨拶を交わした後，そこから１kmほど山間にある「あじさい祭り」会場に移動した。道すがら民家の庭にアジサイが植栽され，導かれるように祭り会場を見下ろす道端の臨時駐車場に到着。そこは山々に抱かれた小盆地であった（**写真２**）。

写真１　手作りの看板

盆地斜面を降りて谷底の水田を横切り，「あじさいばし」がかかるホタルのせせらぎを通って祭り会場に入ると，そこには想像を超えたアジサイの世界があった。同時に人々の熱気にも圧倒された。農産物が並ぶ出店の女性たち，イノシシ肉，

あじさい祭り会場のある３区の集落

会場入口の橋とホタルのせせらぎ

白，青のあじさいがお出迎え

斜面の上まであじさい

写真２　あじさい公園（2015.7.05）

小学生によるあじさい植樹

植栽日を示す標識

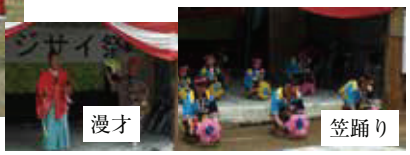
盛大な開会式，来賓には国会議員も。

農産物の出店。イノシシ，アユ，はちみつの屋台も。

羽山太鼓

開会に続いて披露された郷土芸能

獅子舞


漫才

笠踊り

写真３　あじさい祭りの開会行事（2015.7.05）

アユ塩焼，蜜入り蜂巣を並べた屋台，地元各組織の代表者に国・県・市の議員も来賓に招いて進んだ開会式，参会者の記念撮影，「緑の少年団」によるアジサイ苗木の植栽，その後の伝統芸能の競演（**写真３**）。事前に見たweb情報ではスケール感や人々の熱気は伝わらない。まさに「百聞は一見に如かず」の鮮烈な山舟生との出会いであった。

それにしても，宮城県に住んでいると丸森町のイベントは新聞・TVで伝えられるけれども，そのすぐ隣りに魅力的な山里とイベントがあることは県境を越えて報道されない。1990年代，「県際交流」が盛り上がったことがあったが，昨今耳にしないのは，県境による情報遮断が原因かと思わざるをえない。

２）「ペットボタル」－「地域の力」に感嘆

７月11日（土）15時すぎに山舟生に到着。地区に入ってすぐ，西部地区の観音堂の前で「ペットボタル」の飾り付け中の人々と出会う（**写真４左**）。これだけでもなかなかの労力。夜にはバイオリンコンサートが催されるという。続いて「ひまわり園」の看板に誘われて薄暗い脇道に入って川を渡り，ひまわり畑を訪ねる（**写真４中**）。山あいの休耕水田とおぼしき狭い平地にそこだけ陽光を浴びて光り輝くひまわりの群れに感嘆の声をあげる。

17時すぎ，地域の信仰のよりどころである羽山神社に到着して参拝し（**写真４右**），境内と隣接の秋葉神社を一巡して「羽山神社の祭りばやし」の由緒看板を学習。そんな“道草”をしつつ17時半すぎ，まだ明るい「あじさい祭り」会場に到着。自治振興会会長や事務局長をはじめとする地域の方々とあいさつを交わし，園内を巡ったり出店のシシ肉を食したりして夕暮れを待つ。

日没が近づいた頃，ろうそく点灯のお手伝い（右写真）。といっても私たちは１人数個点灯しただけだったが，会場内の斜面上から田のあぜ道まで5,000個もあるというろうそくの

北向観音堂とペットボタル

看板に誘われてひまわり畑へ

羽山神社を初参拝

写真４　地区内の様子（2015.7.11）

羽山のシルエットを背景に深まる幻想的な光のさざ波

カラーLEDの取り付けに子供たちも参加

写真５　ペットボタルの夜（2015.7.11）

点灯の労力を考えただけでも，地域の「まとまり力」を感じざるを得ない。

やがて夕日が稜線に沈んで闇が募るとともに一帯は幻想的な風情に包まれる（**写真５**）。気づくと園内は人波であふれている。「ペットボタル」は，ろうそくを灯したもののほか，淡く明滅する1,500個のカラーLEDを集めた場所もあって，ろうそくとは異なる風情を漂わせる。地元小学生たちが飾り付けたLEDの木もあり（**写真５**左下），「地域の力」をあわせたイベントとなっていることを実感した。

Ⅱ．山舟生の地域性 -- 既存資料による整理

１．立地・沿革

山舟生は，福島県の北端にある伊達市梁川町の地区で，東部は尾根を隔てて宮城県丸森町に隣接している（**図１**）。福島市中心部から約20km，国見ICから車で15分程度，梁川町の中心部からは10分程度と，県境にあっても「僻地」ではない。地形条件は，阿武隈山地に位置して平地の少ない中山間地域といえるが，農林業センサス（2010）では林野率56.8％の「中間農業地域」の「田畑型」に分類されている。集落の立地標高も，山舟生川とその支流沿いの100 ～ 300m程度で，川に沿った平地は水田に，段丘面や傾斜地は畑や樹園地に利用され，奥地山村というより「里山」のイメージがあてはまる。地区の南東部に信仰の山として知られる羽山（458m）がある。

『梁川町史』によれば，山舟生の沿革は，1889（明22）年，近世の村から明治行政村にそのまま移行し，1955（昭30）年に梁川町に合併するまで，長期間にわたって自治体を形成していた。そのため地区内に「大字」はない。2015年７月末の住民基本台帳では，人口は835，世帯数268で，12の行政区に属している。

地区の人々の交流の場としては，山舟生地区交流館（林業構造活性化センター），各区の集会所と神社，村社の羽山神社，山舟生小学校，郵便局，農協支所などがその機能を担っている。これらの「区」の範囲と，住宅地図から読み取った交流施設と小売・サービス業とみられる事業所の立地を示したのが**図２**である。図にみるように，家々は谷筋と緩斜面に散在して分布する場合が多い。

山舟生の中心をなすのは第６区で，小学校，郵便局，農協支所，冬に稼働する和紙伝承館，そして地区交流館が集まる。住宅地図では商店が１つあるが，食品や生活用品をそろえる小売店ではない。

民間の事業所と思しきものがほとんどみられない中で「採石業」が目立ち，地区を通る県道は石を運ぶ大型ダンプの通行が多い。自治振興会によれば，丸森町に接する県境にある採石場は、県北管内の道路や建物に使用する石材の大半を供給しているという。

２．人口,世帯統計の整理

１）人口

人口減少と少子高齢化は今や地方農山村に共通の傾向である。山舟生の国勢調査人口も1995 ～ 2010年の間に1,353から959人へと29％減少した。この減少率は，町場と平地を含む梁川町全体の数値を大きく上回るけれども，隣接する中山間地区と比べると同水準といえる（**表１**）。年齢構成では全般に少子高齢化が進む中で，隣接地区と比べると，山舟生の65歳以上人口率は低めの一方で，15歳未満人口率の低下が著しく（**表１**），高齢化より少子化が顕著である。

表１　山舟生と隣接地区の人口変化（1995,2010）

	人口		変化率	15歳未満率		65歳以上率	
	1995	2010	95-10	1995	2010	1995	2010
山舟生	**1,353**	**959**	**-29.1**	**16.7**	**6.8**	**23.7**	**31.1**
白根	1,201	799	-33.5	16.8	8.3	26.8	37.9
舟生	1,125	793	-29.5	18.8	7.6	24.1	33.3
五十沢	1,299	1,035	-20.3	17.0	9.7	25.4	35.4
梁川町計	21,745	18,749	-13.8	17.4	11.8	20.1	29.1
耕野	1,158	821	-29.1	16.1	7.4	28.0	37.1
大張	1,316	951	-27.7	15.2	10.0	27.8	34.5
筆圃	1,154	774	-32.9	14.1	6.8	31.2	40.6

年齢構造の変化を人口ピラミッドでみると（**図３**），少子化が顕著である一方で，65歳以上人口の増加は顕著ではない。他方，15 ～ 64歳の生産

図１　山舟生の位置（20万の１地製図，50mメッシュ標高，旧自治体境界）

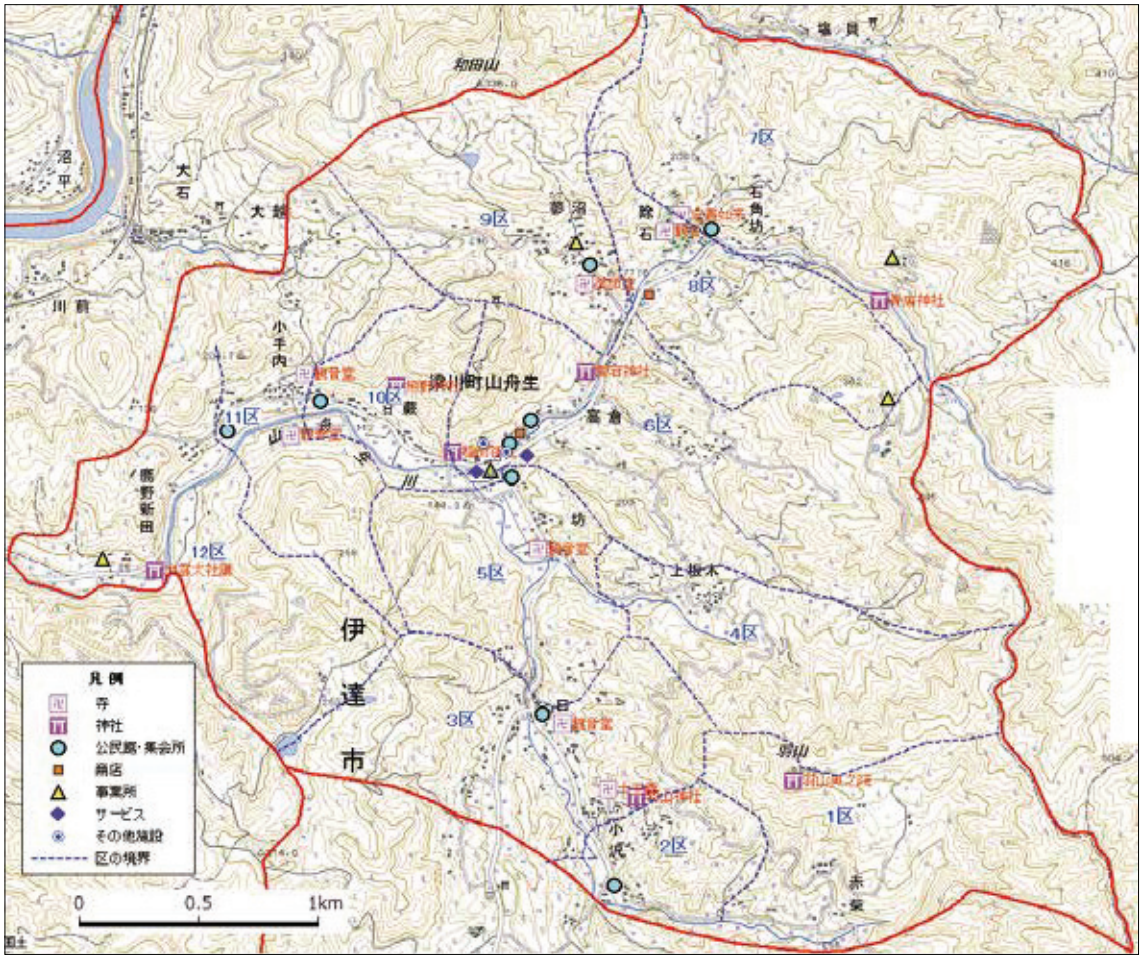


図２　山舟生の行政区と施設立地（地形図画像，住宅地図2015による）

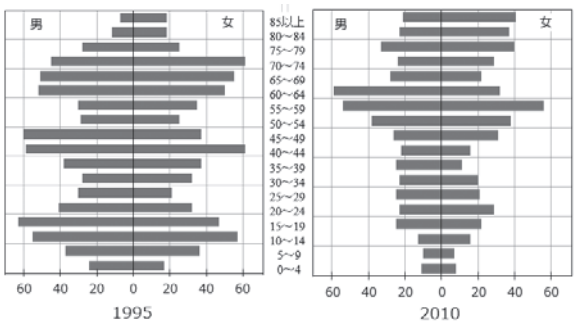


図３　山舟生地区の人口ピラミッドの変化

年齢人口については，維持されているものの，その主力は50代後半の層である。このことから，2010年から５年後の調査時点では高齢世代が大幅に増え，生産年齢人口が大幅に減少していると推察される。

２）世帯

世帯数は人口に比べて減少幅は小さく，山舟生では15年間で27世帯，９％の減少にとどまる一方で，梁川町全体では微増となっている（**表２**）。

表２　山舟生と隣接地区の世帯数（国勢調査）

	一般世帯数		変化率
	1995	2010	95-00
山舟生	**293**	**266**	**-9.2**
白根	273	242	-11.4
舟生	232	219	-5.6
五十沢	303	286	-5.6
梁川町計	5,540	5,626	1.6
耕野	288	262	-9.0
大張	303	279	-7.9
筆圃	314	276	-12.1

他方，家族類型別世帯数の変化をみると（**表３**），「６人以上の世帯」，「18歳未満のいる世帯」が激減して「夫婦のみ」や「単独世帯」が増えている。

これらの数値は，山舟生を含む山間地区で後継者世代が世帯分離して町の中心部へ移り住み，山間部には一人暮らし世帯や高齢者の世帯が残される傾向を示すものと考えられるが，**表３**をよく見ると梁川町中心部（川北，川南）でも高齢者のみ世帯や単独世帯は増えている。このことは，後継者世代の転出は，梁川よりも就業機会に恵まれた保原・伊達方面や福島市を指向することを示すものかもしれない。

表３　類型別世帯数の変化（国勢調査）

	1995				2010			
	6人以上世帯	夫婦のみ世帯	18歳未満いる	単独世帯	6人以上世帯	夫婦のみ世帯	18歳未満いる	単独世帯
山舟生	**113**	**28**	**140**	**15**	**39**	**36**	**55**	**23**
白根	84	34	116	9	29	53	50	32
舟生	91	23	125	5	36	37	54	20
五十沢	99	43	127	13	53	38	73	29
梁川川北	158	167	369	106	85	187	280	155
梁川川南	230	251	724	247	159	292	538	341
梁川町計	1,303	749	2,410	506	692	911	1,591	786

３）震災後の人口・世帯

福島県では2011年の原発事故で，多数の住民が今も避難を余儀なくされているという未曽有の状況にあり，人口・世帯の動向に大きな変化が出ている可能性がある。しかし最新の国勢調査は2015年10月に行われたばかりで，現時点では結果は未公表である。そこで，伊達市の住民基本台帳による人口・世帯数を旧町別にまとめた（**表４**）。

表４　旧梁川町の非就業者世帯率の分布（国勢調査）

	人口			世帯		
	2010.10	2015.1	変化率	2010.10	2015.1	変化率
山舟生	**988**	**835**	**-15.5**	**275**	**268**	**-2.5**
梁川	19,316	17,792	-7.9	5,929	6,017	1.5
伊達	11,275	11,227	-0.4	3,901	4,186	7.3
保原	23,909	22,788	-4.7	7,912	8,169	3.2
霊山	8,794	7,878	-10.4	2,782	2,746	-1.3
月舘	4,104	3,618	-11.8	1,346	1,316	-2.2
伊達市	67,398	63,303	-6.1	21,870	22,434	2.6

これをみると，人口減少率は2005 ～ 10年（山舟生－12.2%，梁川－7.0%）を上回るが，大きな差かどうかは判断できない。世帯数の減少率ではさらに大差ない（山舟生－2.2%，梁川－1.5%）。また上記の推論の通り，福島に近い伊達と保原で人口減少率が小さく，世帯増加率が高い。

こうした中心部と周辺部における世帯類型の分離傾向は，周辺部における非就業者世帯（年金暮らし）の増加と，経済活動の空洞化につながる。**図４**はその「非就業者世帯率」の町丁字別の分布を示す。これをみると，高率の町字が集まるのは山舟生の南隣りの白根地区と梁川中心部である。梁川中心部の世帯数の増加は，若い世代の世帯分離によるものだけでなく，高齢者世帯の転入もあることを示唆すると推察される。

他方，山舟生の非就業者世帯率は比較的低い。しかしこれは，既述の年齢構成を考えると，「2010

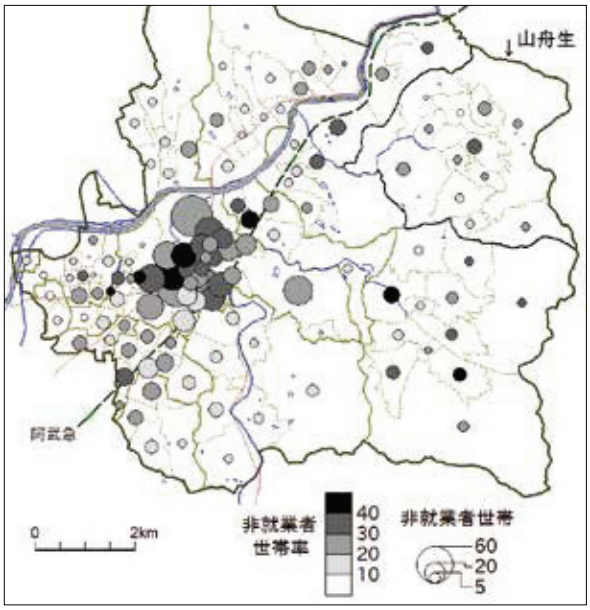


図４　旧梁川町の非就業世帯率の分布（2010国勢調査）

年の時点ではまだ低い」とらえるのが妥当で，2015年の調査結果の公表が待たれる。

４）通勤先

1995年国勢調査の小地域統計には「従業地」つまり通勤先のデータがある。20年前のデータになるが，その後公表されなくなったため，分布図化してみた（**図５**）。これによると，他市町村従事の割合が低い１区と４区は，高齢人口率が40％台と高い。これは「通勤」の可否が生産年金人口と就業者世帯の維持につながっている面があることを示唆するものとして興味深い。

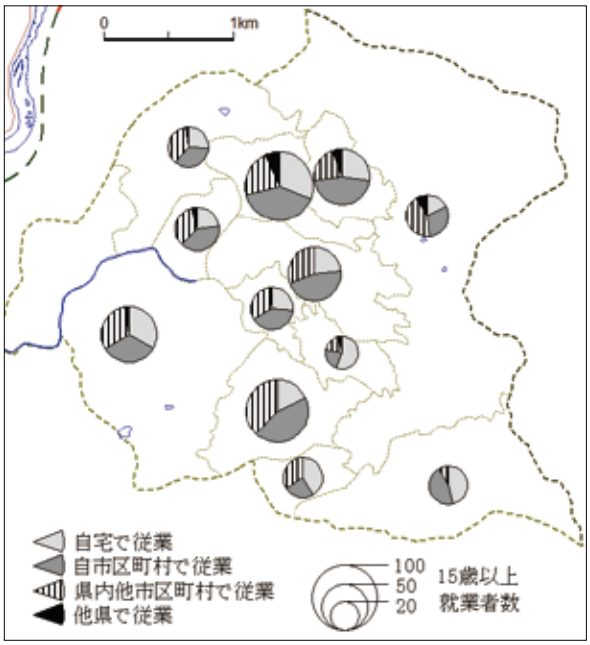


図５　山舟生の就業者の従業地別構成（1995国勢調査）

３．産業統計の整理

１）農業センサスの分析

山舟生の農地は，北東部から流れ下る山舟生川，南東部の羽山の麓に発する大小川，そしてそれらの小支流に沿った狭い平坦面に分布するほか，丘陵斜面に畑が開かれ，各所にカキの木がみられる。農業センサスにより農家数と営農タイプを表す集計項目「経営組織別経営体数」の1980年以降の変遷を整理したのが**表５**である。これによれば，総農家数は35年間で108戸，42％，販売農家167戸，72％も減少した。他方，2015年の総農家数151戸は同年の世帯数268戸の56％，統計上の農家要件（経営耕地10aまたは農産物年間販売額15万円以上）に該当しない「土地持ち非農家」56戸を加えると，約８割の世帯が農地を保有することになる。山間部の農地は，生業として十分な収入にならない面積でも，食材の自給や，日々の生活を豊かにしてくれる自家資源，地域資源として軽視されるべきではない。

表５はまたこの間，営農タイプが大きく変化したことを物語る。1980年に多かった「養蚕」の単

表５　山舟生の農家数と営農タイプの変化

	1980	1985	1995	2005	2015
総農家	259	244	209	171	151
販売農家	232	199	124	95	65
土地持ち非農家	－	－	－	62	56
単一経営	112	107	53	28	23
稲作	4	6	27	5	1
雑穀・いも類・豆類	12	8		1	1
露地野菜	6	8	8	5	14
施設野菜	2	3	2	2	2
果樹類	13	11	7	11	4
その他の作物	5	3	3	2	
肉用牛	1	4		1	
養蚕	66	13	4		
準単一複合経営	92	57	44	41	28
稲作が首位	2	1	4	1	1
露地野菜が主位		2	7	9	24
施設野菜が主位	8	4	3	2	1
果樹類が主位	16	8	19	27	1
養蚕が主位	61	36	9		
その他	4	5	1	1	
複合経営	28	35	25	18	14

いずれの年も２戸以下の分類項目は省略。「－」データなし

一経営と準単一経営が95年までに激減し，その代替作目も明瞭ではなく，それが農家数自体の減少にもつながっている。そうした中で，95年には稲作，野菜，果樹を含む類型が増えたが，2000年代に入って果樹と野菜以外は農家数を減らした類型が目立つ。稲作を含む類型が非常に少ないのも，平地に乏しい中山間部の特徴といえる。

販売農家の経営耕地面積と年間販売額を規模階層別にみると（**表６**），経営耕地面積では0.5～1.5ha，販売額では50万円から300万円までの各階層が大半を占める。平均経営面積は2010年に0.51haと町内最小であったが，2015年には0.45haとなった。しかし自治振興会事務局でのヒアリングによれば，２ha以上や500万円以上の農家は，いずれも米，あんぽ柿，キュウリ，サヤエンドウを組みあせて栽培する専業的農家で，生産性は高いという。

表６　経営耕地と年間販売額規模別販売農家数

経営耕地面別

	2010	2015
3.0～5.0	1	
2.0～3.0	1	2
1.5～2.0	6	6
1.0～1.5	17	9
0.5～1.0	42	36
0.3～0.5	14	11
0.3ha未満	3	1

販売金額別

	2010	2015
3000 ～ 5,000	1	
700 ～ 1,000	5	1
500 ～ 700	4	3
300 ～ 500	7	9
200 ～ 300	16	23
100 ～ 200	15	18
50 ～ 100	15	7
50万円未満	15	4
販売なし	4	

専業兼業別では，第二種兼業が販売農家の過半を占める中で，専業農家数は2010年25戸，2015年22戸と両年とも約3割ある。そのうち「男子生産年齢人口あり」は2010年10戸，15年９戸，「女子生産年齢人口あり」も両年とも９戸あり，これらが上記の「生産性の高い専業的農家」に該当し，経営面積1.5ha以上，販売額500万円前後の層に対応するものとみられる。

中山間地域で問題となっている耕作放棄地率をみておくと（**表７**），山舟生は旧梁川町内では同じ山間部の白根地区と並んで高かったが，震災後の2015年はさらに急増して４割を超えた。生産性の高い複合経営で収益をあげる少数の農家がいる一方で，放射能被害の余波もあって条件の悪い農地から放棄が進んでいる状況がみてとれる[★2]。

表７　耕作放棄地

	2010		2015	
	耕作放棄面積	耕作放棄地率	耕作放棄面積	耕作放棄地率
山舟生村	**30**	**25.9**	**46**	**40.4**
白根村	33	28.4	50	43.9
富野村	42	18.2	63	27.0
五十沢村	27	11.9	44	18.8
梁川町計	269	16.5	409	25.4

農業の最後に，山舟生内部における地域性についてみておきたい。**図６**は「販売１位部門別農家数」の構成を集落別に円グラフで示したものである。農業センサスの「農業集落」は，山舟生では行政区とほぼ一致する。

図によると，果樹類が１位の農家は西部の９～12区に多く，露地野菜１位の農家は全域で多い。また４・５区では施設野菜１位が最多を占める。現地観察によれば果樹はほぼカキで，傾斜地だけでなく，９～12区では川に沿う平坦面にも植えられている。

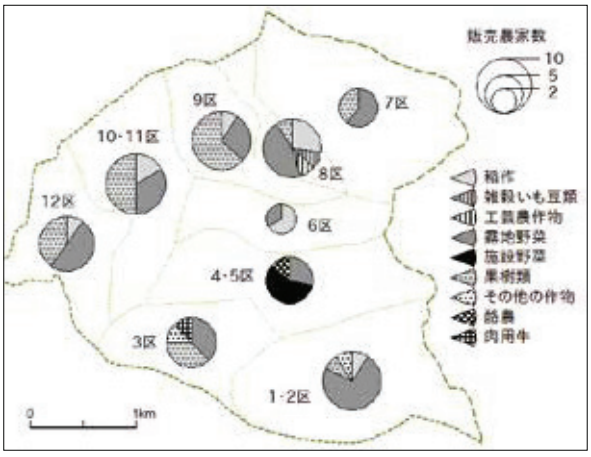


図６　販売１位部門別農家数の農業集落別分布

２）林業

農林業センサス（2010）では，山舟生には農業と林業を兼営する経営体が70あり，保有山林面積３ha未満が45戸，３～５haが15戸，５～10haが５戸，10ha以上が２戸である。国土数値情報の森林地域データ（2016）によれば，山舟生の森林はすべて民有林である（**図７**）。民有林には地区北部の和田山45haなど，旧村有林[★3]を継承した財産区林が含まれる。炭焼きが行われたり桑園が開

図７　山舟生の森林分布（細線は国調小地域境）

かれた時代とは異なり，山林は今では生計基盤にはならない。しかし放射能事故の前までは，山菜の採取や狩り場となり，共有林は希望者の利用に供されて，貴重な生活資源を得る場所であった。

４）事業所

高度経済成長期以降，首都圏から多くの工場移転を受け入れてきた中通り地方も，円高不況による製造業の海外移転によって就業機会を減らしてきた。とりわけ幹線交通から離れた山間部から産業空洞化が進行している。山舟生ではどうだろうか。

表８は，事業所企業統計（2001）と経済センサス（2014）によって，事業所数と従業者数を産業大分類別に示したものである。産業分類が大きく変わって正確な比較はできにくいが，かつて山舟生で多かった鉱業、建設業、サービス業の従事者のいずれも，大幅に減少している。2001年に従業員数が最多だった鉱業・採石の事業は，2014年に０となった。商業・サービス業の事業所は10から７へ，その従事者は41人から22人に半減した。現在の山舟生にはコンビニや「よろずや」のような小売店はない。事業所の縮小は，人口減少・高齢化と表裏をなすといえる。

表８　山舟生の事業所数の変化（2001, 14）

	2001	
	事業所	従事者
全産業	20	106
鉱　業	3	36
建設業	3	20
製造業	2	4
運輸･通信業	2	5
卸売,小売,飲食	5	9
サービス業	5	32

	2009		2014	
	事業所	従事者	事業所	従事者
全産業	12	45	12	37
鉱業,採石,砂利採取業	1	7		
建設業	3	15	3	16
製造業				
運輸業,郵便業	1	1	1	1
卸売業,小売業	3	5	3	3
宿泊業,飲食サービス業				
生活関連サービス,娯楽				
教育,学習支援業	1	7	1	7
医療,福祉				
複合サービス事業	2	8	2	7
サービス業(その他)	1	2	1	2

Ⅲ．山舟生の「場所」めぐり

2015年９月２～４日，合宿調査を実施した。その最初として，地元の人々が地域を代表すると考えている「場所」，地域のシンボルや生活の「よりどころ」としての場所を案内していただくようにお願いした。その結果，初日の午前は地域最大のシンボルである「羽山」への登山，午後はその他のスポットを巡るという視察が準備された（**表９，図８**）。本章では，その「場所資源」について報告する。

表９　実地視察の行程（2015年９月２日）

視　察　内　容
1030　**羽山登山** … 自治振興会長，産業振興部
1300　社務所で昼食 … 各種おにぎり，漬物，豚汁
1330　自治振興会長より，むらづくりの歴史について説明
1430　**山舟生の"場所"めぐり** ・羽山神社，秋葉神社，十王堂（1区） ・和田山，採石場（7･8･9区） ・北向観音 … 八巻定義，会長，事務局長 ・出雲大社，千本松 … 八巻平，会長，事務局長

１）羽山登山

９月２日10時，地区交流センターに集合して，羽山神社に移動・参拝した後，羽山登山を敢行した。羽山は山舟生地区民が信仰を寄せる標高458mの山で，「三山」に見立てた三つのピークには「奥の院」や祠が，ピークから東に続く尾根筋の参道には「三十三観音」の小祠群が祀られて（**写真６，７**），山全体が霊山となっている。東麓の天狗岩の登山口から急斜面を30分ほどよじ登って，尾根に出て．これらの信仰スポットを巡った。

また，群生地をなすショウジョウバカマをはじめとする山野草の数々，サンショウウオが棲む湧水地（**写真７下**），花崗岩の奇岩など，多様な自然スポットが地元の人々によって見出されていおり，これらも１つ１つ案内していただいた。

図８　巡検スポット（2015.9.02）
赤点：GPS座標点（羽山登山時は不取得），黒点線：移動コース

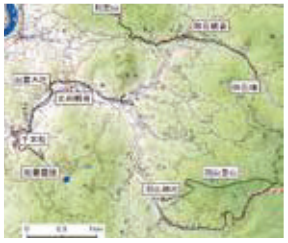


写真６　羽山登山口から山頂へ
上左：天狗岩の入山口，上右：登山道，中左：中羽山の祠，
中右：山頂の奥の院，下：山頂で記念写真

下山後，羽山神社の社務所で会長・事務局長の奥さんたちが用意した昼食をいただいた後，山舟生の村づくりの流れについて，議員として地域のまとめ役を務めてきた自治振興会長よりヒアリングした。

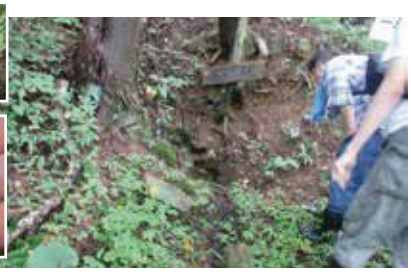


写真７　尾根沿いの探勝スポット
上左：山頂から東に続く尾根筋の参道，上右：小祠の１つ
下：湧水地「一杯清水」とサンショウウオ

写真８　和田山からの眺望。手前はカキの木

写真９　除石観音堂

写真10　砕石場の看板

2）和田山，除石観音，採石場

・和田山 … 地区の北端にあり，旧村以来の共有林となっている。共同梨園も造成されて，地形図の記号では桑園になっているが，今はカキが目立つ。共有林の一角にエゴノキが植栽されていて，春に白い花が咲き，その実からとれる種子は，地元有志によって「お手玉」づくりに利用されている。山腹にある溜め池の土手は，伊達盆地が一望できる絶景スポットになっている（**写真８**）。

・除石観音堂 … 続いて８区の除石（よけいし）へ。信達地方では江戸時代に観音信仰が盛んになり，各所に観音堂が造られて観音巡りが行われた。山舟生には札所が５つあり，除石観音堂（**写真９**）はその12番札所[★4]。獅子舞が奉納されるようになり，1974年，「除石観音様の獅子舞」として梁川町無形民俗文化財に指定されている。

・砕石場 … 阿武隈北部には花崗岩や玄武岩の地層が分布し，各所で建材用に採掘されている。山舟生にも双葉砕石，梁川採石，佐藤砂利砕石の３事業場があり，地元の方によれば，これらは県北地方の砕石の大半を供給してきたという[★5]。今回訪れた丸森町に接する県道の両側に，双葉砕石と梁川砕石の事業場に通じる道路が確認できる。そのうち梁川砕石事業場のゲート脇の説明看板（**写真10**）で砕石場の概況を学習した。

3）西部地区

・北向観音堂 … ７月11日のあじさい祭りの折，ペットボタルの飾り付けが行われ，演奏会が催されていた北向観音堂を訪問。氏子の代表者からその由来について聞き取りした。信達33観音の10番札所で，氏子23戸，境内の石碑に残る最古の年号は「安永」（1772 ～ 81）という。観音は千手観音で，手先が器用になるご利益があり，３月と９月に祭りが催される。1967年，境内の杉の古木の販売収入に氏子の浄財をあわせて，茅葺きからトタンに変えた。境内からは，川向こうの小手内の集落と小手内観音堂が見わたせる。

・出雲大社 … 地区西端の12区に，出雲大社の分霊社と信夫・伊達両郡の講員が集まる信達講社会堂がある（**写真11**）。大国主を祀る出雲大社は，大黒様（福の神），縁結びの神として知られ，ここでは出雲大社と同じ御札が入手できる。４月末と10月末の祭礼日には会堂は満員になる。折しも学生の１人が虫に刺されて肌が腫れあがり，管理人夫人に秘薬？を塗ってもらったところ，腫れは見る間に快癒し，大国主パワーに一同感心。

写真11　出雲大社講会堂

・舟生の千本松 … 山舟生の西端から舟生地区に入ったところに赤松の巨木（**写真12**）があり，1975年，「舟生の千本松」として梁川町の天然記念物に指定されている。幹回り3.2m，樹高16m，幹が多数分岐した「多行の松」となっている。つまり「千本」は枝の数のこと。その昔，義経軍が阿武隈川をはさんで合戦した際，弁慶が多数の死者を弔う墓標として植えたとの伝説が残る。

写真12　舟生の千本松

・七ツ釜砕石場跡の露頭 … 以前は，第三紀の初めに噴出した霊山火山灰の地層群が褶曲や断層とともに観察でき，県教委の理科教材としても紹介され，地元小学校の現地学習も行われる「名所」だった。しかし砕石が中止されて年数が経過するとともに，アクセス道路は穴ぼこになり，表面が土砂に覆われ，樹木が繁茂して視界が遮られ，地層は見えなくなっている（**写真13**）。

以上，午前２時間，午後２時間で垣間見ただけであったが，観光ガイドに記されるような場所も事績もなく，よそ者には特徴があるようにもみえない「普通」の山村も，地元の人にとっては意味

写真13　砕石場跡の露頭

ある場所で満ちていることを実感した。特に神社，お堂，祠は集落ごと屋敷ごとにあり，また同行した地元の方は山野の花々や植物を１つ１つ指さして解説してくれた。

まさに山村においては集落の各所に「聖なる場所」がある。周囲の山野も都会では望めない地域資源であり，いわゆる「生態系サービス」の源泉であることを再認識させられる体験であった。

Ⅲ．山舟生の自治組織と地域づくり

１）自治振興会

山舟生の自治と地域づくりの指令棟となっているのは，2015年４月に発足した山舟生自治振興会である。その特徴は，人口減少と高齢化で活動が困難になっている地域の各種団体を束ねて５つの「部会」に取り込み（**図９，表10**），相互に補完協力体制をとれるようにした。これは限られたマンパワーを効果的に活用して地域活動を維持する工夫をした，新しい時代の自治組織体であるといえる。

事務局は地区交流館に置かれ，事務局長と局員が，水曜以外の週６日，交代で常駐して対処する。まさに地域自治のコントロールセンターとしての機能を果たす。運営の要となる事務局長には，県職員を退職して地元に戻っていた有能な人材を委嘱し，事務局や各部会の幹部には公民館長や区長の経験者，基幹的農業者，各グループのリーダーをあて，また特定の区に偏らないように配慮している。

自治振興会の活動にかかる財源は，１戸１万円の年会費計250万円，市の「地域自治組織活動支援交付金」240万円，施設事務の受託費72万円など，事務局と各部の活動に振り向けられる。

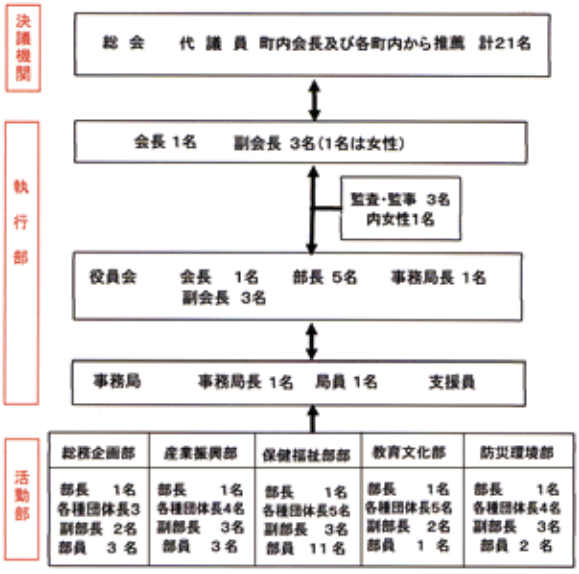


図９　山舟生自治振興会の組織体制

２）地域自治モデル地区事業

山舟生自治振興会の立ち上げには，2013・14年度にわたる伊達市の「地域自治モデル事業」による取り組みがあった。伊達市まちづくり推進課での聞き取りによれば，同事業の経緯として，近隣自治を担ってきた町内会の自治力が，高齢化と人口減少の中で将来の弱体化が避けがたい状況から，小学校区単位での新たな自治組織が必要と考え，新組織への移行をめざす「モデル事業」への応募を2013年に呼びかけた。それに対して，まさに同じの問題意識を抱いていた当時の山舟生自治会と「むらづくり推進協議会」のメンバーが共同でこれに応募した。応募は山舟生だけであったという。

モデル事業への採択をうけて，山舟生では，12の行政区と各地域団体の代表者による「地域自治モデル事業検討委員会」を組織して，市に開設された市民活動支援センターと地域おこし支援員の支援を受けて，地域の課題を探るための住民意識調査の実施と集計の作業を行った。同時に，山舟生地区公民館の６つの分館ごとに計13回にわたる住民懇談会を実施して，地区の課題と「良さ」の再確認の作業を行った。こうした意見収集活動を通して，課題別に優先度を付して対応策を整理し

表10　山舟生自治振興会の主な活動内容

	予算（万円）	主な活動（右記の団体支援のほか）	各部に代表者を出している組織,グループ
事務局	202	各種団体の事務，予算決算，市・関係機関の窓口業務，共同募金，傷害保険	
総務企画部	31	各部の案件の交通整理，冠婚葬祭，広報誌発行，市の窓口，困りごと相談，事業計画，施設管理（交流館，旧公民館，公園），後継者，婚活	部分林管理組合，農村広場管理委員会，水道委員会，財産管理委員会
産業振興部	45	羽山山開き，あじさい祭り，イノシシ対策，中山間地域直接支払，多面的機能交付金，便利屋活動の検討，特産品開発	羽山連絡協議会，農事組合，生産営農部会，鳥獣対策委員会
健康福祉部	69	元気づくり会の支援，健康推進員の支援（検診向上），民生委員の支援，各区サロンの支援，	婦人会，長生会（敬老会），社会福祉協議会，民生委員，食生活改善部会
教育文化部	106	山舟生運動会，盆踊り，文化祭，生涯学習，伝統文化・神社仏閣の調査・マップづくり，料理研究発表会，小学校統廃合，交流館の活用	体育協会，PTA，青少年育成推進協議会，生涯学習（旧公民館），スポーツ少年団
防災環境部	126	河川浄化，不法投棄，防災マップ，避難路，農道林道の維持，除雪計画，生活環境部会支援	消防団，防災ボランティア協会，交通安全協会，防犯協会

※予算は2015年度。下線は，「むらづくり推進協議会」の部会を継承。

表11　抽出された地域づくり課題とアイディア

		※	対策アイディア
自然と共に生きる地域	イノシシ対策	5	対策方法，生態調査，電気策，オリ貸与など
	自然を楽しむ	3	公園整備，花木の調査，見ごろ情報など
	草刈，林道管理	3	必要箇所の調査，管理方法の調査，行政と相談
	羽山の利用	4	天文台，キャンプ場，花マップ，情報発信
	天文台	3	観測愛好会を結成
	和田山公園	2	維持管理の方法検討
	鉱泉	2	専門家に調査依頼，地権者の意向調査
文化を守り育てる地域	羽山例大祭	5	太鼓の練習会の定期開催，小学校で太鼓授業，太鼓の名簿づくり，太鼓保存会の設立，山車巡行方法の検討，新出し物検討，花受けの検討
	郷土芸能	5	芸能の洗い出し，地域ぐるみの組織化，人材育成，地区外にも募集，披露の場を開拓
	神社仏閣，七不思議	5	紹介冊子づくり，六地蔵の発掘，風穴への道整備，保存会の結成
	あじさい祭り	5	山舟生全体の取り組みに，ペットボタルに工夫凝らす，交通整理，トイレ整備
	若者参加の仕組み	5	若い人だけの話し合い
	和紙	5	保存会がなくなった理由を調べて改善
	イベント	3	心から楽しめるように
	地図・看板の更新	3	
人と人をつなげる地域	情報発信	5	出身者名簿づくり，ネット利用，mail, LINE利用，マスコミにPR，イベント時にPRチラシ
	見守り，空き家	5	防災スピーカー，地域広報誌，掲示板の活用，元気旗の設置
	若い人の場	5	青年会の復活，若い人の場づくり，イベント実行委員を依頼，体験型イベントにする
	サロン	5	参加しやすいサロン名称，拝み講で世代交流，合同サロン
	交流館の活用	4	
	交代制居酒屋	2	

		※	対策アイディア
暮らしやすい地域	除雪	5	協力実施体制，費用負担，優先順位，市との分担
	香典	5	香典返し，快気祝いの見直し
	小学校	5	統廃合の話し合い，体験学習充実，保護者と住民とのかかわり方
	健康	5	遊歩道づくり，健幸都市づくり，健康教室，移動診療所，検診皆受診
	上下水道	5	上水道敷設，公衆トイレ，合併浄化槽
	安全	5	外灯設置，ダンプ対策，砕石場と話し合い
	買い物	5	地域の店，買い物代行，JA宅配，JA支店の土日開業
	交通手段	5	山舟生専用デマンドタクシー
	イベント	3	イベントの反省
活気とやりがいがある地域	便利屋	5	人材バンク，サービス種類，料金，配食
	農業	3	観光農園，里芋オーナー制，農業共同化
	資源開発		鈴虫，魚養殖，サルナシ，花苗，葛，甘蔗
	特産品	3	わら，竹，つる等の民芸品，和紙の活用
	食資源	3	伝統保存食，春菊餅，羽山漬の販路拡大，そば，山舟生ブランドづくり
	直売所	3	場所，収支，複合機能の検討
	経済効果	3	イベントにあわせた集約・経済効果を検討
	観光開発	3	健康，マイナスイオン，ホタル川，羽山開発，案内板，生物・歴史の調査
	自然エネルギー	4	小水力，風力，太陽光，外灯に利用，他の自然エネ

※優先度

た行動計画表（**表11**）が作成された。

市の担当職員によれば，この膨大な調査の実施と集計作業は，山舟生の人々の力で手際よく行われ，その「地域力」は驚かされたという。その背景には30年来の歴史を持つ「むらづくり協議会」の活動の実績があり，町内会の代表による「自治会」と，実働部隊としての「むらづくり推進協議会」が両輪で地域をまとめてきた実結があり，市の職員はそれを「他にはないこと」と評価していた。またその方式が，新たな「自治振興会」の参考にされたという。

3）「むらづくり推進協議会」の継承

山舟生の「地域力」の背景という「むらづくり推進協議会」とはどのようなものかについて，自治振興会への聞き取りによって整理する。1982年10月，「山舟生地区明るく住みよいむらづくり推進協議会」（以下「むらづくり協議会」）が結成された。現伊達市内で同様の組織が作られたのは，隣接の白根地区と山舟生の2つだけである。当時は稲作減反政策の開始から10年がすぎて転作が強化され，圃場や水路の整備と施設化・機械化を柱とする「農業構造改善」と集落環境の整備事業が各地の農村で進んだ時代である。山舟生でも1970年代中頃に区画整理や大型ハウスの導入が実施された[★6]。そして1982年，「地区再編農業構造改善計画」策定の指定をうけて，1983年4月に農業基盤や集落環境の３ケ年にわたる整備計画がまとめられた。その最終年の1985年には，現在の自治振興会事務局がある地区交流館が「林業構造改善センター」として落成している。

「むらづくり協議会」は，ハード面の環境整備にあわせて，ソフト面での「村づくり」のために，地域内の各団体の代表者が構成員となって設立された。会の目的には「山舟生の地域特性を生かした豊かで住みよい地域社会建設のため，住民の総意に基づきむらづくり実践活動を行う」ことが掲げられている。その具体化のために生産営農，生活環境，食生活改善，後継者の４部会が設けられた。このうち後継者以外の3部会は，現在の自治振興会の各部の構成組織として継承されている。また同事業が農業基盤整備にかかわることから，農業協同組合が中心的な役割を果たし，梁川町農協山舟生支店内に事務局が置かれ，営農指導員が事務局長となり，会長には農協の職員や理事，農業者が選ばれてきた。

「むらづくり協議会」は2015年３月の解散に際して，30年余年にわたる活動年表を「むらづくりのあゆみ」と題するリーフレットとして作成した。それに基づいて山舟生の地域づくりの流れを示したのが**表12**である。これによると，会の設立まもない1980年代前半に各種の制度資金を導入して環境整備を図り，80年代後半からは各種の表彰を受けるとともに，イベントが行われるようになった。

「ふるさと創生」が唄われた90年代には，羽山と伝統芸能をむらづくりのテーマとして認識されて，羽山の遊歩道整備や案内版，散策しおり作成、キャッチフレーズ看板の設置などの整備が進んだ。

そして現会長が就任した2000年代には，「アジサイ」と「ホタル」という里山の環境資源が注目されて，地域を代表するイベントになるとともに，羽山と伝統芸能が県レベルでも顕彰されるようになった。またこれらの事業には，90年代後半から増えてくる中山間地域の「多面的価値」の整備と，折からの養蚕衰退による遊休農地の整備に関する事業が活用された。

活動は大震災・原発事故という困難に直面した2011年以降も衰えず，春菊餅，あじさい公園の整備，LEDペットボタルの導入が次々に企てられた。他方，そのような中でも10年後の担い手減少と高齢化への危機状況を直視して「地域自治モデル事業」に応募し，2015年４月，新たな「自治振興会」への移行が果たされた。30余年の「むらづくり」の流れは以上のように整理できる。（未完）

表12　山舟生の地域づくりの歴史
（「むらづくりのあゆみ」を修正。）

年　月	できごと
1982 10	山舟生地区明るく住みよいむらづくり推進協議会設立
	・初代会長　八巻利恵寿氏
	・農林水産省地域農業コミュニティー醸成事業
1983 1	むらづくり指針「わが地域山舟生のしるべ」作成
1984 3	地域再編農業構造改善事業、農村広場竣工
1985 6	あいさつ運動の推進と会合時間の厳守　標語募集
	「あいさつと笑顔でつくるむらづくり」最優秀賞
	「むらづくり時間厳守の心から」
10	林業者定住化推進事業　林業構造改善センター竣工
1986	福島県「豊かな村づくり顕彰事業」優秀集団
	・住民に信頼と誇りを持たせた山間集落におけるむらづくり
1987 2	ホワイトピア'87冬「農山村の未来に新たな展望を目指して」
1988 2	地域の伝統芸能を一堂に・・・「ふれあいのつどい」
3	食生活情報サービスセンターより食生活改善部会に感謝状
4	梁川農協より表彰「農村と農業の発展に寄与」
10	山舟生36景ウォークラリー
	ホワイトピア'88冬
11	東北政局長賞、むらづくり部門で受賞
1990 8	むらおこしコンサート　中村淳真ギターセレナーデ
11	町ふるさと創生事業，第1回ふるさと大賞受賞（地域振興部門）
1991 3	むらづくり推進協議会10周年記念式典
	・理想の郷づくり発表会及び記念植樹
1992 5	二代目会長に八巻政衛氏
1994 10	ギンナン視察研修会
1995 10	羽山遊歩道整備
11	山舟生和紙復活
1996 8	案内板，羽山めぐり散策しおり，キャッチフレーズ看板設置
11	中山間地域総合整備事業（農道,集落道,圃場,公園等整備）
	遊休農地解消支援事業
1997 4	平成9年度一般コミュニティー助成事業
	・羽山連絡協議会が太鼓等購入
9	三代目会長に佐藤福二氏
1998 3	ゴミステーション看板設置、地区内15か所
1999 1	中山間地域活性化事業アンケート調査
4	東京梁川会　羽山太鼓，除石獅子舞保存会東京へ
7	一関のあじさい園視察
2000 4	四代目会長に八巻善一氏
	羽山が「うつくしま百名山」に選定
	第1回　羽山山開き
5	幕田義男氏「養蚕功労賞」受賞祝賀会
6	埼玉県越生町のあじさい園視察
7	中山間地域等直接支払制度　集落協定　9団地加入

年　月	できごと
2001 12	遊休農地解消支援事業
	平成13年度一般コミュニティー助成事業
	・除石観音獅子舞保存会が備品購入
2002 4	羽山山車祭り，「うつくしままつり50選」に選定
	地域づくりサポート事業採択（平成14～16年）
	・あじさいとほたるの郷づくり
2003 2	むらづくり推進協議会20周年記念式典（林構センター）
6	アダプトロードプログラム調印式
7	第1回　ほたる&アジサイまつり
8	国土交通大臣賞受賞表彰式
2004 1	福島県サポート事業事例報告会
2005 4	中山間地域総合整備事業竣工式
8	恵みの農地再生事業
2006 11	第1回　山舟生そば祭り
2007 3	山舟生伝承郷土芸能「祈り,歓びCD」贈呈式
2008 3	「元気出せ山舟生」地区民発表会
7	中山間地域づくり総合整備事業（平21～23），羽山山車改修
	第1回　ペットボタル開催
11	集落活性化県民討論会「東北大学大学院&むらづくり」
2009 2	掘り起こそう「ふるさと料理2009冬」
8	「2009ふくしま山車フェスタ」初参加
10	大学生の力を活用した集落活性化調査事業（東北大）
11	山舟生甘わらび　里帰り
12	伊達市協働まちづくり推進市民会議視察
2010 2	山舟生地区集落活性化調査報告会　福島大学
7	「2010ふくしま山車フェスタ」参加
2011 2	うつくしま百名山　羽山登山道案内看板設置
	羽山山車まつり・地区案内マップ作成
3	東日本大震災，原発事故
2012 12	「春菊もち」開発
2013 2	むらづくり推進協議会30周年記念式典
7	「地域自治モデル地区事業」の立ち上げ
7	あじさいウォーク，フォトコンテスト（第10回アジサイ祭り記念）
2014 3	福島県木景観形成促進事業
	アジサイ公園案内板・木製階段等設置
6	丸森町耕野・筆圃の自治組織視察（地域自治モデル事業）
7	第6回ペットボタルでLEDペットボタル採用
10	輪島白米千枚田「あぜのきらめき」LEDライトアップ視察
2015 3	山舟生自治振興会設立，むらづくり推進協議会解散

＜注＞

★1：東北大学公共政策大学院A（2010，2011）：山舟生地区調査活動報告．以下のサイトに公開されている。（https://www.pref.fukushima.lg.jp/sec/11025b/tiikishinkou-27.html）

★2：市域の南東端の旧霊山町内３か所，旧月舘町内４か所に2011年９月，「特定避難勧奨地点」が指定された。2014年末までにすべて解除。

★3：『梁川町史』10巻，旧町村沿革，山舟村の章に，明治39年に国から村に払い下げられた和田山をはじめとする村有林についての記述がある（935～936頁）。

★4：『梁川町史』10巻，旧町村沿革，山舟生村の章に，「準秩父伊達三十四観世音」の10～14番（北向，小手内，除石，坊，勝木）が紹介されている（960～962頁）。一方，同11巻，「神と仏の信仰」の章には「信達三十三観音」の記述があり，山舟生では上記のほか，清水，山窪，加老、八幡鬼石の観音の記述がある（542～544頁）。さらに羽山の尾根沿いにも「三十三観音」の石祠が草に埋もれて

並ぶ。

★５：山舟生の鉱業事業所数は，2001年の経済センサスでは３，2009年は1であったが，2014年のセンサスでは０で，３事業場とも休止状態にあることになる。

★６：『梁川町史』３巻，現代の項に，農業構造改善の記述があり，山舟生について短い言及がある（637頁）。

＜文献＞

梁川町史編纂委（1994）：梁川町史，第10巻（各論編）

梁川町史編纂委（2000）：梁川町史，第３巻（近現代）

謝　　辞

調査にあたっては，山舟生自治振興会会長の八巻善一さん，事務局長の佐藤憲栄さんをはじめ，多くの地元の多くの方々にお世話になった。記して謝意を表します。

ゼミメンバー：金澤理砂（代表），山田佳奈，藤岡愛花，早坂綾香，阿字正樹，久保貴義，武藤史明